

ウィズコロナ・アフターコロナ社会の道しるべ⑤

陸上競技スプリント種目の世界大会で初めて日本人としてメダリストとなった為末大氏は「走るスポーツは『移動』という行為で、マラソンや駅伝、ブームが定着した自転車も『道』の上を『移動』するもの」と語る。道路空間への考えも地に足が付いている。聞き手は日本みち研究所の中川拓朗 研究者。



新豊洲Brilliaランニングスタジアムでアスリートの指導に取り組む為末氏(右から3人目)＝撮影：関健作

今回のコロナ禍をどう捉えていますか

「オリンピック・パラリンピックは、平和の祭典といわれていますが、そもそもオリ・パラの開催は、地球規模の『安定』を4年に1回確認するリトマス紙のような役割を果たしてきました。今回は、戦争や内戦とは異なる想定外のパンデミック(世界的大流行)に直面することとなりました。最近、スポーツ界はグローバル化が進む中、スタジアムに人を大勢集めることがKPI(重要業績評価指標)となっていました。現在、ご存じのように1カ所に世界中の人が集まること自体が否定されるようになってしまい、これもスポーツをとりまく環境の変化として、われわれスポーツ界に関わる人間が乗り越えなければならぬことだと実感しています」

「自身の生活の変化では、これまで都心で買い物をすることが多かったんですが、コロナ禍と言われるようになってからは、地元でのローカルな買い物が増えました。家から約2kmの範囲の中で、八百屋さんのような個人商店を利用するようになりましたね。地元を散歩することも増えました。あまり利用していなかった出前や持ち帰り、通信販売も頻りに利用しています」

「新しい生活様式」を過ごされての感想を聞かせてください

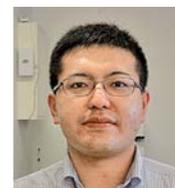
「今回の移動など活動自粛期間の中で感じたことは、やはり人間は移動したがる生き物だということですね。実際に私も歩くことはもちろん、自転車に乗る機会も増えました。移動できない、歩けなくなってしまう人生というのは、Quality Of Lifeの低下につながると思います。その中で、少子高齢社会を迎えた現在、歩行寿命をどこまで伸ばせるかが、重要なテーマであると考えられるようになりました。歩行寿命がある限り、自由な日常生活や経済活動が可能となります。歩行寿命と密接なのがウォーキングですが、『みち』や『まち』を歩きたくなるもしくは動きたくなるようにアフオーダンス(※)していくことが今後求められるようになると思います」

「現役時代、オランダに住んでいたことがありますが、非常に平たんな地形なので、自転車利用が盛んな地域でした。自転車で走りやすい専用空間がきちんと整備されており、走行ルールも体系化され、より自転車に乗りたくなる気分にアフオーダンスされています。日本国内でも、もっと『みち』を、歩きたくなる、移動したくなるようにアフオーダンスすることが重要ではないでしょうか」

日本の道路について、どんなイメージをお持ちですか

中川 拓朗氏

日本みち研究所調査部みち空間グループ 研究員。



為末 大氏

スプリント種目の世界大会で日本人として初のメダル獲得者。男子400mハードルの日本記録保持者(2020年9月現在)。現在は人間理解のためのプラットフォーム為末大学(Tamesue Academy)の学長、アジアのアスリートを育成・支援する一般社団法人アスリートソサエティの代表理事を務める。新豊洲Brilliaランニングスタジアム館長。



「道路を示す『みち』という言葉は、道路の機能を越えたさまざまな意味を想起させる特別な深い言葉、概念だと思っています。われわれスポーツ選手の『みち』は、先が見えずずっと続くような、ゴールがあるようでない、『終わらない道』『追及する道』のようなイメージです。リアルな『みち』であれば、例えば、車が行き来する広い道路を封鎖すると人が集まるイベントスペースに早変わりし、封鎖を取り払うとふたたび車が走る空間になる。みち空間は『大きな空間』なのかな。そういう意味では道路の使い方はもっと多様になってほしいと思います」

「日本の道路ネットワークは、充実していると実感しています。だから物流も非常にレベルが高い。以前住んでいたアメリカは、それに比べるとひどかったです(笑)。わが国ですすがおいしいのは職人さんの腕だけではなく、いかに魚介類を新鮮に運ぶかにかかっていると聞きました。国内各地の漁港で揚がった魚介類は、すしねたにいいタイミングで、日本全国のどの町にも届く。今後おいしい生活を確保するために、道路ネットワークはしっかりと整備されるべきだと思います。要望したいこととしては、ランニングと自転車は、世界的に競技人口が特段に多い2大スポーツで両方とも公道で行われますが、そのことにももっと目を向けてほしい。『ついでに使わせる』というより、ランナーや自転車のための道路整備がなされれば本当に素晴らしい。時代が変わればニーズも変わります。ランニングって、昔は罰ゲームでしたからね」

※アフオーダンス＝外部環境が人間に与える知覚。例えばドアノブがあるとそれを押すか引くなど。認知心理学の概念。

アフオーダンスな道づくりを



～ 道路・交通イノベーションをめざして～

一般財団法人 日本みち研究所

理事長 石田東生筑波大学名誉教授
(<http://www.rirs.or.jp/>) 「みち研」で検索